明治大学
農学部

か

国語，数学，理科(化学，生物)問題

はじめに，これを読みなさい。

1. これは，国語，数学，化学，生物の4科目の問題を綴じた冊子である。必要な科目を選択して解答しなさい。食料環境政策学科受験者は「国語」が必須である。
2. 問題は，数学，化学，生物については表面から75ページ，国語については裏面から14ページある。**ただし，ページ番号のない白紙はページ数に含まない。**
3. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか，受験票と照合して確認すること。
4. 監督者の指示にしたがい，解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5. 監督者の指示にしたがい，解答用紙にある「解答科目マーク欄」に1つマークし，「解答科目名」記入欄に解答する科目名を記入しなさい。なお，マークしていない場合，または複数の科目にマークした場合は0点となる。
6. 解答は，すべて解答用紙の所定欄にマークするか，または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答番号は各科目の最初に示してある。
7. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
8. 解答は，必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
9. 訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
10. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
11. **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず，必ず提出すること。
12. この問題冊子は必ず持ち帰ること。
13. マーク記入例

良い例	悪い例

国　語　問　題

はじめに裏返して表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. この問題は 14 ページあります。
2. 解答番号は 1 ～17, 101～104, 201～203 です。
3. 数学・化学・生物は裏面から順にあります。

国　語

（解答は解答用紙に横書きで記入すること。解答番号は1～17、101～104、201～203）

(一)

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

社会の理想的なあり方を構想する仕方には、原的に異なった二つの発想の様式がある。

一方は、歓びと感動に充ちた生のあり方、関係のあり方を追求し、現実の内に実現することをめざすものである。一方は、人間が相互に他者として生きるということの現実から来る不幸や抑圧を、最小のものに止めるルールを明確化してゆこうとするものである。これは、社会思想史の歴史的な分類ではなく、社会の思想の現在的な課題の構造である。現在のわれわれにとって意味のある社会の構想の発想の様式は、究極、この二つに集約されるといっていい。

前者は、関係の積極的な実質を創出する課題。

後者は、関係の消極的な形式を設定する課題。

二つの課題は、人間にとっての他者の両義性[1]に対応している。他者は第一に、人間にとって、生きるということの意味の感覚と、あらゆる歓びと感動の源泉である。一切の他者の死滅したのちの宇宙に存続する永遠の生というものは、死と等しいといっていいものである。他者は第二に、人間にとって生きるということの不幸と制約の、ほとんどの形態の源泉である。サルトルが言っていたように、「地獄とは他者に他ならない」。想像のものでなく現実のものとしての地獄は、ほとんどが、他者の地獄に他ならない。

社会の理想的なあり方を構想する仕方の発想の二つの様式は、こんにち対立するもののように現れているが、たがいに相補す

るものとして考えておくことができる。一方は美しく歓びに充ちた関係のユートピアたちを多彩に構想し、他方はこのようなユートピアたちが、それを望まない人たちにまで強いられる抑圧に転化することをケイカイ[a]し、予防するルールのシステムを設計する。両者の構想者たちの間には、ほとんど「体質的」とさえ感じられる反発が火花を散らすことがあるが、[2]一方のない他方は空虚なものであり、他方のない一方は危険なものである。それはこのような社会の構想の課題の二重性が、人間にとっての他者の両義性に対応しているからである。

〈他者の両義性〉のうち、生きるということの意味と歓びの源泉である限りの他者と、生きるということの困難と制約の源泉である限りの他者とは、[3]その圏域を異にしている。圏域を異にしているということの単純な認識が、社会構想の理論にとって、実質上決定的な意味を持つ前提である。たとえば二〇世紀を賭けた「コミュニズム」という巨大な実験の破綻[b]は、この圏域の異なりに無自覚であったということに起因するとさえいってよいものである。全域的ではありえないものの美しい夢を、全域的であるもののように、ありうるもののように、あるべきもののように、あるはずのもののように、幻想した自己欺瞞（ぎまん）の内にあったとさえいってよいものである。

「人はどれだけの土地を必要とするか」というロシアの童話があるが、人はどれだけの関係を必要とするかということを、わたしたちは問うてみることができる。他者のない生は空虚であり、先にみたように、一切の他者の死滅した後にただ一人永遠の生を享受する生は、ほとんど永劫[c]の死と変わりのないものであるが、この生が生きるということの意味を取り戻し、歓びに充ちた生涯であるためにさえ、他者はたとえば、数人で充分であるということもできる。わたしの思考実験では、極限の場合、激しい相互的な愛が存在している限り、この他者は一人であっても、なお永劫の生を意味づけるに足るものである。対をもって最小となすという思考には批判があるかもしれないし、わたしもこの点に理論上固執するつもりはないが、最大限に考えて数十人という、純粋に愛し合う人びとに囲まれた生が、歓びに充ちた生であることにとって、なお不足があるというよくばりな人は、少ないと思う。

もちろんわれわれは現実の構造の中で、幾万人、幾百万人、幾億人という他者たちなしには、生きていけない。現代日本の都

市に住む平均的な階層の一人の人間を考えてみれば、食料を生産する国内・国外の農民たち、牧畜者たち、石油を産出する国々の労働者たち、これら幾億の他者たちの存在なしには、一つの冬を越すことも困難である。この意味で人は、幾億の他者たちを「必要としている」ということもできる。けれどもこのような、生存の条件の支え手としての他者たちの必要ならば、それは他者たちの労働や能力や機能の必要ということであって、何か純粋に魔法の力のようなものによって、あるいは純粋に機械の力か、自然の力等々によって、それが充分に供給されることがあればよいというものであり、[4]この他者が他者でなければならないというものではない。つまり他の人間的な主体でなければならないというものではない。他者が他者として、純粋に生きていることの意味や歓びの源泉である限りの他者は、その圏域を事実的に限定されている。

これに対して、他者の両義性のうち、生きるということの困難と制約の源泉としての他者の圏域は、必ず社会の全域をおおうものである。

現代のように、たとえば石油の産出国の労働者たちの仕事にわれわれの生が依存し、またわれわれの生のかたちが、フロンガスの排出等々をとおして、南半球の人びとの生の困難や制約をさえ帰結してしまうことのある世界にあっては、このような他者との関係のルールの構想は、国家や大陸という圏域の内部にさえ限定されることができない。たとえば一国の内域的な社会の幸福を、他の大陸や、同じ大陸の他の諸地域の人びとの不幸を帰結するような仕方で構想することはできない。

つまりわれわれの社会の構想の二重の課題は、関係の射程の圏域を異にしている。

歓びの源泉としての他者との関係のユートピアの構想の外部に、あるいは正確には、無数の関係のユートピアたちの相互の関係の構想として、困難の源泉でもある他者との関係のルールの構想、という課題の全域性がある。圧縮すれば、われわれの社会の構想の形式は、

〈関係のユートピア・間・関係のルール〉

という重層性として、いったんは定式化しておくことができる。

あるいはこれを、極限にまで単純化された〈モデル0〉ともいうべきものとして視覚化するなら、次のように、いったんは図示

しておくことができる。（図を参照）

〈関係のユートピア〉と仮に名づけておくものの内部の他者たちは、交歓する他者たちである。図の［X］は、〈交歓〉という関係のモードを表現する。この交歓する他者たちの圏域の外部の他者たちとの関係は、相互にその生き方の自由を尊重し侵さないための協定を結び、このような自由を保証するための、最小限度に必要な相互の制約のルールのシステムを明確化する。図の［Y］は、このような〈尊重〉という関係のモードを表現する。つまりわれわれの社会の理想像において、すべての他者たちは相互に、

〈交歓する他者〉and/or〈尊重する他者〉

として関わる。

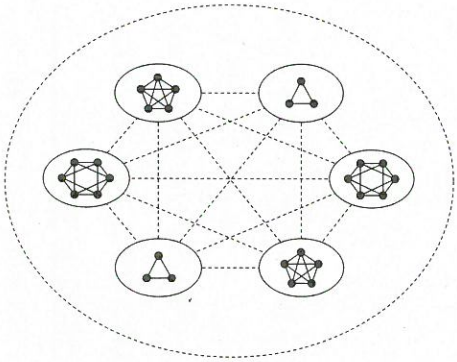

図　〈モデル0〉

関係のこの二つの基本的なモードは、われわれの社会の構想が、〈他者の両義性〉のそれぞれの位相に対応する仕方である。この〈尊重する他者〉たちの相互の協定とルールのシステムは、社会の理念史としてよく知られているコンセプトでいえば、「契約」の関係である。いいかえれば、われわれの社会構想のうち、全域的なフレームを構成する原理の形式は、近代の〈市民社会〉の理念のエッセンスというべきものと、基本的に同じものである。

これに対して、われわれの社会構想の構成の二重性のうち、積極的な実質のユニットを構成している、〈交歓する他者〉たちの関係のユートピアというコンセプトは、社会の理念史のうちで知られているコンセプトとの対応でいえば、「コミューン」という経験のエッセンスを確保しながら、個の自由という原理を明確に優先するということを基軸に、批判的な転回を行なおうとするコンセプトである。

この批判的な転回は、核となる論点なのであえてくりかえして展開すれば、社会のこれまでの理念史のうちの「コミューン」という名称のほとんどが強調してきた、「連帯」や「結合」や「友愛」ということよりも以前に、個々人の「自由」を、優先する第一義として前提し、この上に立つ交歓だけを望ましいものとして追求するということである。それは個人たちの同質性でなく、反対に

個人たちの異質性をこそ、積極的に享受するものである。サルトルが、その社会理論において提示した、「溶融集団」――そこでは他者の他者性は溶融するという――とは反対に、他者の他者性こそが相互に享受される関係の圏域である。われわれにとって好ましい〈コミューン〉は、異質な諸個人が自由に交響するその限りにおいて、事実的に存立する関係の呼応空間である。

このように、われわれの社会構想の積極的な実質のユニットをなす〈関係のユートピア〉たちが、コミューンという経験のエッセンスをその生命として擁護するものでありながら、個々人の自由を、優先する第一義として前提すること、個々人の異質性をこそ希求し享受するものであることを表現するために、これを[5]〈交響圏〉、あるいは〈交響するコミューン〉と名づけておくことが出来る。〈交響するコミューン〉というコンセプトには、〈溶融するコミューン〉その他、同質化し「一体化」する共同体の理想に対する、批判の意思がこめられている。

いっそう具体的な仕方で展開しておくならば、それは個々人が、自在に選択し、脱退し、移行し、創出するコミューンたちである。このようにユートピアたちを選択し、脱退し、移行し、創出することの自由は、再び外域の市民社会の、――正確にいえば、ユートピアたち相互の間の関係の協定としての――ルールのシステムによってはじめて現実に保証される。

市民社会のルールの海の中で、コミューンは自由なものでありうる。実質の価値という方向からいいかえるなら、[6]〈関係のユートピア〉たちの自由を保証する方法としてのみ、〈市民社会〉のミニマルなルールのシステムは、構築されるべきものである。だからわれわれの社会の構想の一般的な形式の表現としての、〈関係のユートピア・間・関係のルール〉ということは、二重の仕方で[d]テッテイされた〈自由な社会〉の構想としての、積極的な実質のイメージをこれに代入して定式化するなら、

〈交響するコミューン・の・自由な連合〉

として表現しておくことができる。

（見田宗介『社会学入門――人間と社会の未来』による）

〔註〕
○サルトル――フランスの文学者・哲学者（一九〇五～一九八〇）
○コミュニズム――共産主義
○モード――あり方、様式
○ユニット――単位、構成単位
○コミューン――自治的な共同社会（たとえば、一九世紀フランスにおける「パリ・コミューン」など）

問一　二重傍線部a・dのカタカナを漢字に直して書きなさい。解答番号はaが 101 、dが 102

問二　二重傍線部b・cの漢字部分の読み方を平仮名で書きなさい。解答番号はbが 103 、cが 104

問三　傍線部1「他者の両義性」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 1

A　他者は具体的な人間関係を構成する一方で、抽象的な人間関係も作り出すということ。
B　他者は生きる意味を与えてくれるので、その死滅は死に等しいものであるということ。
C　他者は想像や現実の区別なく、地獄のような苦しみを与える源泉であるということ。
D　他者は歓びや感動の源泉であるが、同時に、不幸や抑圧の源泉でもあるということ。
E　他者は不幸や抑圧の源泉であるが、他者のいない世界は空虚で危険であるということ。

問四　傍線部2「一方のない他方は空虚なものであり、他方のない一方は危険なものである」とあるが、「一方」と「他方」がそれぞれ指す内容として、最も適切なものを次の中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は「一方」が［2］、「他方」は［3］

A　現実の認識　　B　理想の追求　　C　ルールの構想

D　ユートピアの構想　　E　不幸と抑圧　　F　歓びと感動

問五　傍線部3「その圏域を異にしている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は［4］

A　かつての「コミュニズム」は、社会上のさまざまな格差をないもののように幻想することで、かろうじて国の秩序を保っていたということ。

B　真に愛し合い、信頼している他者がいれば、わずかな人数でも生きて行くことが可能だが、そうでない場合はかなりの程度の人数が必要であるということ。

C　家族や恋人のような愛情の対象となる他者は少数でもよいが、人間の生存条件を支えるために必要な他者も、ある程度は必要だということ。

D　地球規模で経済活動が行われる時代には、常に多くの地域との関係を保つことが重要だが、一方で小さな規模の人間関係も大切にする必要があるということ。

E　生きることの意味や歓びの源泉である他者の数は限定されているが、困難と制約の源泉である他者との関係はあらゆる範囲に及ぶということ。

問六　傍線部4「この他者が他者でなければならないというものではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 5

A　人々の生存の条件を支えるための役割を担うものとしての他者は、機能や自然の力があれば、特に必要とされないということ。

B　生存の条件の支え手として求められるような他者は、生の歓びの源泉となる他者である必要はないということ。

C　困難と制約の源泉としての他者は、必ずしも、生の意味や歓びの源泉としての他者ではないということ。

D　農民や労働者たちは、単に社会の中で機能として存在しているだけで、生の意味や歓びを供給できるような存在ではないということ。

E　農民や労働者は人々が生存するために欠かせない他者であるが、同時に、自由や生きる歓びを阻む他者でも有り得るということ。

問七　空欄 X と Y に入る言葉を次の中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は空欄 X が 6 、空欄 Y が 7

A　小さな円　　B　大きな円　　C　黒点　　D　点線　　E　実線

問八　傍線部5「〈交響圏〉、あるいは〈交響するコミューン〉」とあるが、それはどのようなものか。文章中の言葉を用いて二〇字以内で説明しなさい（なお、句読点や記号等がある場合は、それも一字とする）。解答番号は 201

問九　傍線部6「〈関係のユートピア〉たちの自由を保証する方法としてのみ、〈市民社会〉のミニマルなルールのシステムは、構築されるべきものである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 8

A　コミューンにおいては、個々人の異質性が大切にされることによってのみ、連帯や友愛を強めることができるということ。

B　社会において個々人の自由を優先することは大切であるが、最小限度の制約やルールがないと無秩序な空間になってしまうということ。

C　ユートピアの自由な創出や選択を可能にするためには、市民社会のルールを最小限度にとどめる必要があるということ。

D　他者を縛る制約やルールは、運用の仕方を間違えると危険なので、あくまでも連帯や友愛に基づいて使用する必要があるということ。

E　共同体は常に同質化を理想とするが、あえて個人の自由を認めることで、同質化が伴う弊害を小さくすることができるということ。

問十　次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 9

A　生存の条件の支え手となる他者がたとえいなくても、親愛なる関係を築ける他者がいれば、生きることの意味を知ることができ、生の歓びや感動を享受できる。

B　生きる歓びや自由に充ちた関係のユートピアを構築するためには、一見、それとは矛盾したように見える抑圧的な統制やルールが、どうしても必要となる場合がある。

C　多くの他者と共に生きることは、必ず苦痛をまねく結果となるので、必要最小限の他者とどのように暮らすかを考えることが、自由を手に入れるための重要な課題となる。

D　他者は生きるうえでの困難や制約の源泉であり、その関係の範囲は決して限定することができないので、相互の存在を尊重するためのルールをいかに構想するかが大切である。

E　他者がいない生は空虚であり、必然的に我々は異質な他者を受け入れねばならないので、他者の他者性を克服するための構想が必要である。

（二）次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

［Ⅰ］もの　経など習ふとて、いみじう[1]たどたどしく忘れがちに、かへすがへす同じ所をよむに、[2]法師はことわり、男も女も、くるくるとやすらかによみたるこそ、あれがやうにいつの世にあらむとおぼゆれ。心地などわづらひて臥したるに、笑うち笑ひ物など言ひ、思ふ事なげにて歩みありく人見るこそ、いみじううらやましけれ。

稲荷に思ひおこして詣でたるに、中の御社のほどの、[3]わりなう苦しきを念じのぼるに、いささか苦しげもなく、おくれて来と見る者どもの、ただ行きに先に立ちて詣づる、いとめでたし。二月午の日の暁に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、[4]巳の時ばかりになりにけり。やうやう暑く［Ⅱ］なりて、まことにわびしくて、「など、かからでよき日もあらむものを、[5]何しに詣でつらむ」とまで、涙も落ちてやすみ困ずるに、四十余ばかりなる女の、壺装束などにはあらで、ただ引きはこえたるが、「まろは七度詣でしはべるぞ。三度は詣でぬ。いま四度はことにもあらず。まだ未に下向しぬべし」と、道に会ひたる人にうち言ひてくだり行きしこそ、ただなる所には、目にもとまるまじきに、[6]これが身に、ただいまならばやとおぼえ［Ⅲ］。

（『枕草子』より）

〔註〕

○稲荷――京都にある伏見稲荷神社

○壺装束――女性が物詣でや旅行に徒歩で外出するときの服装

○引きはこゆ――着物の裾をたくし上げること

○七度詣で――上中下の三社を一日で七度詣でること

問一　空欄 [I] に入る、本文全体の主題に当たる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は [10]

A　ねたましき　　B　くるしげなる　　C　こころもとなき

D　うらやましげなる　　E　わびしき

問二　傍線部1について、「たどたどし」と反対の意味になる語を次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は [11]

A　はかばかし　　B　つきづきし　　C　しなじなし

D　をさをさし　　E　つつがなし

問三　傍線部2「法師はことわり」とあるが、その意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は [12]

A　法師は納得せず　　B　法師はうまくいかず

C　法師には理由がなく　　D　法師は言うまでもなく

E　法師は受け入れず

問四　傍線部3「わりなう苦しきを念じのぼるに」の口語訳として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 13

A　これ以上苦しくならないようにと祈りつつ登っていると
B　あまり苦しくないと思いながら登っていると
C　とても苦しいのをがまんしつつ登っていると
D　予想以上に苦しいと嘆きながら登っていると
E　割に合わない苦しさだと呪いつつ登っていると

問五　傍線部4「巳の時」は何時頃にあたるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 14

A　午前五時頃　　B　午前八時頃　　C　午前十時頃
D　午後一時頃　　E　午後三時頃

問六　空欄 Ⅱ に入る最も適切な助詞を次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 15

A　より　　B　さへ　　C　まで
D　すら　　E　ばかり　　F　など

問七　傍線部5「何しに詣でつらむ」を口語訳せよ。解答番号は 202

問八　傍線部6「これが身に、ただいまならばや」とあるが、「これ」が指すものを本文から十字以内で抜き出しなさい（句読点も一字とする）。解答番号は 203

問九　空欄 Ⅲ に入る最も適切な語を次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 16

A　せ　　B　き　　C　し　　D　しか

問十　次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 17

A　経を読むのはむずかしいので、うまく読める人たちを見習いたいと思う。

B　気分が悪く横になっている時に、それを笑っているのは許しがたい。

C　稲荷に参詣した折、後から来る人たちが先を越していくのが、本当に腹立たしかった。

D　暑い中、稲荷詣での際に一人取り残されて、とてもさびしくなった。

E　途中であった女は、未の頃にはきっともう下山しているだろうと言った。